

〈中学校 外国語科〉

## 主体的に英語学習に取り組むことができる生徒の育成

— 「自己調整学習」を取り入れた学習過程の工夫を通して —



浦添市立浦西中学校

新里 美和子

# 目次

I	テーマ設定の理由	33
II	めざす子ども像	33
III	研究の目標	34
IV	研究仮説	
1	基本仮説	34
2	作業仮説	34
V	研究構想図	34
VI	研究内容	
1	主体的に学習に取り組む態度	35
2	自己調整学習	35
3	My goal の設定	37
4	めあて・振り返りの充実	38
VII	授業実践	
1	単元名	39
2	単元の目標	39
3	単元について	39
4	単元の評価規準	40
5	単元の指導と評価の計画	40
6	単元末または学期末におけるパフォーマンステストとそのルーブリック	41
7	本時の学習	41
VIII	結果と考察	
1	作業仮説(1)の検証	43
2	作業仮説(2)の検証	46
IX	研究の成果と課題	
1	成果	48
2	課題	48
	主な参考・引用文献	48

# 主体的に英語学習に取り組むことができる生徒の育成 — 「自己調整学習」を取り入れた学習過程の工夫を通して —

浦添市立浦西中学校 新里 美和子

## 【要約】

本研究は、「書くこと」の領域において、「書くこと」の必要性を感じる目的・場面・状況の設定の工夫や、振り返りの充実を図るために「自己調整学習」を取り入れた学習過程を通して、生徒が主体的に英語学習に取り組むことができるようになることを目指したものである。

キーワード □自己調整学習 □目的や場面、状況等 □My goal □振り返り

## I テーマ設定の理由

生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、絶え間ない技術革新等、社会の在り方がこれまでとは劇的に変化している時代において、未来を担う子どもたちを取り巻く環境は予測困難である。未来を創造していく子どもたちが、生涯にわたって自分自身で問題を解決し、自ら能動的に学び続ける自立した学習者になることが今まさに求められている。

学習指導要領においても、今回の改訂で「学びに向かう力・人間性等」に沿った目標が示され「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」に変わった。また、「外国語教育における『学びに向かう力、人間性等』は、生徒が言語活動に主体的に取り組むことが外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力を身に付ける上で不可欠であるため、極めて重要な観点である。」(中学校学習指導要領平成29年告示解説)ことを踏まえると、学校の授業だけでなく、学校教育外でも、積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度や、コミュニケーションツールとして外国語習得に取り組もうとする態度を育成していくことは、変化していく社会情勢の中で、不可欠であると思われる。

これまでの授業実践を振り返ってみると、コミュニケーションの目的が明確であればあるほど生徒たちは生き生きと表現活動、やりとりや書くことを楽しんでいた。相手意識・目的意識が毎時間の授業を活性化させ、生徒たちに学ぶ意欲を与えていたように感じる。これは外国語教育に限らず、生徒が与えられた課題をこなす学習でなく、この相手意識・目的

意識こそ、今まさに求められている「学びに向かう力・人間性等」の土台となるものだと考える。

「学びに向かう力・人間性等」の土台として、「自己調整学習」がキーワードになると考える。すなわち、粘り強くあきらめずに取り組む姿勢と、自ら学習を振り返って、次の学びに向けて目標を設定し、改善していく態度などである。この自己調整の3要素、「メタ認知・動機づけ・行動」を取り入れることで、学びの継続を図ることができ、その学びが積みあがり生徒は主体的に英語学習に取り組むことができるであろうと考える。

生徒の実態として「書くこと」が苦手、粘り強さが足りないことが昨年度・今年度の県学力定着状況調査の結果分析で読み取れた。自己調整学習を取り入れながら、生徒自身に「書くこと」の必要性を持たせ、同時に、「書きたい」と感じるような目的・場面・状況を教師が設定していく工夫を通して、主体的に英語学習に取り組むことができる生徒を育てていきたい。

そこで本研究では、自己調整学習を生かし、ツールとしての英語を用いてどう活用していくか、どうコミュニケーションを図る資質・能力を身に付けることができるか、を実践研究、実践検証したいと考え、本テーマを設定した。

## II めざす子ども像

相手意識・目的意識をもち、自己調整を図りながら、主体的に英語学習に取り組むことができる生徒

### Ⅲ 研究の目標

「自己調整学習」を取り入れた学習過程を通して、「書くこと」の必要性を感じる目的・場面・状況の設定や主体的に英語学習に取り組む生徒の育成を研究する。

### Ⅳ 研究仮説

#### 1 基本仮説

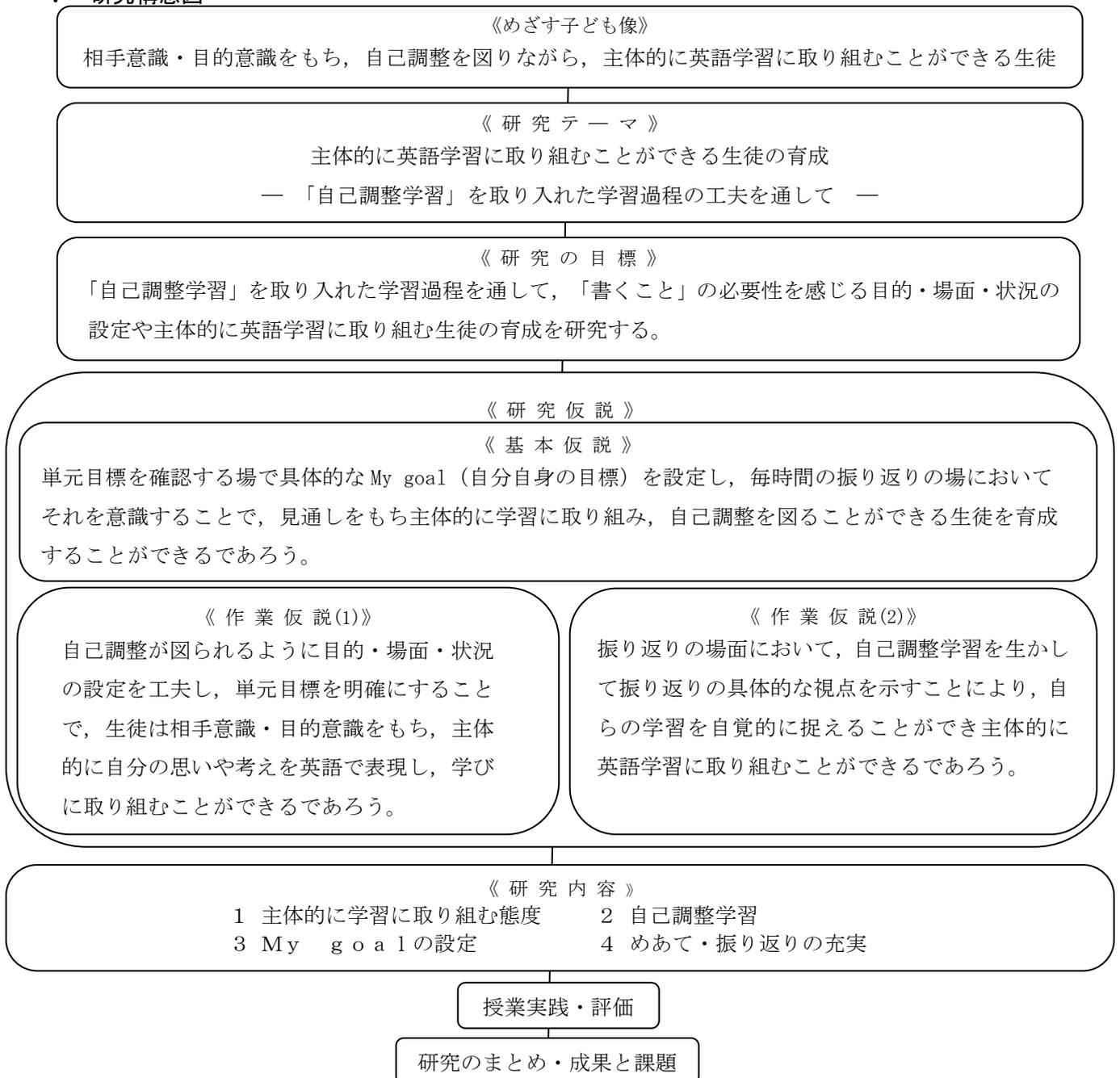
単元目標を確認する場で具体的な My goal（自分自身の目標）を設定し、毎時間の振り返りの場においてそれを意識することで、見通しをもち主体的に学習に取り組み、自己調整を図ることができる生徒を育成することができる。

できるであろう。

#### 2 作業仮説

- (1) 自己調整が図られるように目的・場面・状況の設定を工夫し、単元目標を明確にすることで、生徒は相手意識・目的意識をもち、主体的に自分の思いや考えを英語で表現し、学びに取り組むことができるであろう。
- (2) 振り返りの場面において、自己調整学習を生かして振り返りの具体的な視点を示すことにより、自らの学習を自覚的に捉えることができ主体的に英語学習に取り組むことができるであろう。

### Ⅴ 研究構想図



## VI 研究内容

### 1 主体的に学習に取り組む態度

#### (1) 学びに向かう力・人間性等

平成 29 年改訂の学習指導要領において、育成すべき資質・能力の三つの柱が提示された。その中のひとつが「学びに向かう力・人間性等」である。「主体的に学習に取り組む態度」はその評価の観点である（図 1）。

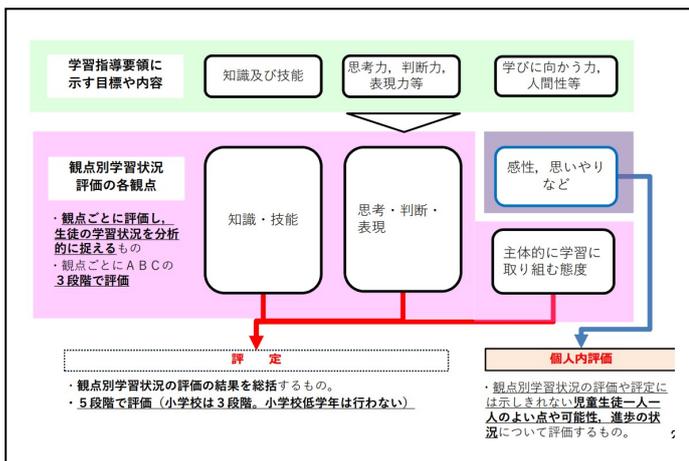


図 1 各教科における評価の基本構造  
出典 国立教育政策研究所（2020）

中央教育審議会（2016）の答申での「性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解」を受け、従来の「関心・意欲・態度」から「主体的に学習に取り組む態度」に改められた。そこで、知識習得に重きを置く授業でなく、英語というコミュニケーションツールをどう活用して表現していくかを生徒一人一人に考えさせたい。そのうえで表現を何度も使ってみることで生徒にも自信が生まれコミュニケーションを図る資質・能力を身に付けることを目指す極めて重要な観点だと考える。

#### (2) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

「主体的に学習に取り組む態度」の評価について「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとしている状況の評価する」とある。「『思考・判断・表現』と基本的には一体的に評価しつつ、言語活動へ

の取組状況を観察しその結果を加味すること」、また「表出する性格や行動面の傾向を評価するというでなく、知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力を身に付けたりするために、自らの学習状況を調整しながら、学ぼうとしている意思的な側面を評価することも重要である」とある（「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 2020）。これらのことを、瀧沢（2023）は、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとしている状況」と「自らの学習を自覚的に捉えている状況」を観点の趣旨として述べている。

例えば、「書く」場面の評価において生徒の「表現したり伝えあったりしようとしている状況」と「言語活動の取り組みに関して、見通しを立てたり、振り返ったりする状況」の両方を見取る必要がある。その際、ルーブリックの作成等も必要になる。そこをきちんと押さえることにより、これまで幾度も現場で悩んでいた「主体的に学習に取り組む態度」の評価が、生徒・教師の両者にとっても納得のいくものになると考える。

## 2 自己調整学習

### (1) 自己調整

Zimmerman（1989）は自己調整学習における「自己調整」とは、「学習者が、メタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」と定義している。

「メタ認知」とは、自己調整学習研究会（2012）によると、「学習者が学習プロセスのさまざまな段階において計画を立てたり、進み具合などを自己モニターし自己評価をしたりすること」である。

「動機づけ」とは、「自己調整学習者が、高い自己効力感でもって学習に取り組んでいるかどうか」を指している。自己効力感とは、Bandura（1977）によって提起された期待に関する概念で、ある結果を生み

出すために必要な行動をどの程度うまくできるかという個人の確信のことを表している。

「行動」については、「自己調整学習者が、学習を最適なものにする物理的・社会的環境を自ら選択し、構成し、創造していること」である。物理的環境とは、例えば、辞書を準備したりなど自分の机まわりを学びやすい環境に作り上げることなどである。一方、社会的環境とは、自分分からないことを周りの友人に教えてもらうなど学びあいによって、自らを高めていこうとすることである。なお、伊藤（2009）は、「行動」ではなく「学習方略」としている（図2）。



図2 自己調整学習の3つの要素（出典 VIES21）

伊藤（2009）は、「この3つの要素を備えていると自己調整学習ができている状態だと考えられる」と述べている。

(2) 自己調整学習の3要素を踏まえた授業

表1は、西田・久我（2018）が自己調整学習の3要素と開発したツールの機能、として構想したものを筆者が一部抜粋してまとめたものである。

メタ認知では、見通しをもった計画的学習として、単元目標とCAN-DO リストを合わせた自己評価シートを活用する。さらに、単元全体の見通しと単元のまとめとしてのパフォーマンステストを評価規準とともに明示する。生徒が単元目標を確認しながら自分自身で計画を見通し、その都度自己モニター（チェック）しながらゴールに近づくために、振り返りとして自己評価ができるようにイメージしている。

表1 自己調整学習の3要素を組み入れた授業

自己調整学習要素	期待できる効果
メタ認知	見通しをもった計画的学習 ↓ 自己モニター ↓ 自己評価 ↓ 目標の明確化・具体化
動機づけ	学習の意味・意義の理解 ↓ 自己効力を有するものとしての自己認知・意欲の喚起 ↓ 目標実現へ意識化・意欲化
学習方略	学習の最適化のための環境選択・構成・創造 ↓ 学びの継続 ↓ 目標実現への行動化

動機づけとして、学習の意味・意義の理解を促進させながら、ペアや小グループでの交流活動はもちろん、外部に目を向けて、例えば後輩に〇〇について伝えよう、などとする目標を提示し、その対象となる相手からの温かいフィードバックを受け取ることによって効果的な動機づけを促すことができる。同時に、例えばAETや英語が得意なクラスメートの発音やモデルスピーチを参考にすることで英語学習に対する意欲が高まり動機づけも高まっていくと考える。

行動（学習方略）としては、学習の最適化のための環境選択・構成・創造として、学びの場である教室の「物理的」「人的」環境を生かし、学習道具がそろった空間・振り返りの共有の場の設定・サポートを得

られやすい座席の工夫等を設定することを実施する。

この3要素を具体的に活用することで、自己調整しやすい内的・質的環境が整い、教師主導ではない、主体的な学びに取り組む生徒を育成できると考える。

### 3 My goal の設定

#### (1) My goal のねらい

単元の最初の時間に My goal を生徒自ら設定する時間を設けることを大切にしたいと考える。なぜなら生徒一人一人に、単元終了時のなりたい自分をイメージさせ「自分ごと」として単元目標を捉えさせる貴重な機会になると考えるからである。この「自分ごと」の意識が主体的な学びにつながると考える。そこで、自己評価シートに My goal 欄を設け、単元の最初の時間に単元目標と合わせて学習の見通しを持たせるために自分の目標を書かせた。文字にして残すことでより「自分ごと」が明確になると考えた(図3)。

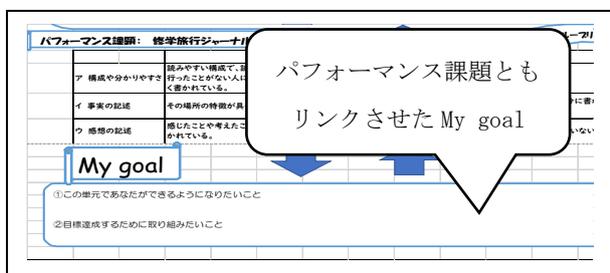


図3 My goalが入った自己評価シート

学びの主人公はあくまでも「生徒」である。生徒主体の授業づくり・授業改善を大切にしたい。また学習指導要領では「文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、(中略)言語活動と効果的に関連付けて指導すること。」とある。My goal を考えさせることで、文法事項の教え込みや定着だけにとらわれることなく、生徒一人一人に、「何をするために」「どのような場面で」その文法(言語材料)を使うのか、役に立つのか、ということがより明確になると考える。

#### (2) 「学びの自覚」とは

「学びとは何か」に対して「知識や技能の獲得」と捉えることが多いと思われる。よって必然的に教科の授業は「『獲得されるべき知識や技能』を明確にして、それらを子どもが獲得しやすいように構想し、最後はそれらが本当に身に付いているのかをテストによって評価するものになる」と高橋(2022)は述べている。また、学びを「人間形成」の視点から捉え直す授業実践を進めている。高橋は「学びがよい」は、「知識や技能の量から得られるものではなく、教科という文化と自分自身とのかかわりの中から得られるものである」と考えているからである。その考え方は、育成すべき資質・能力の三つの柱の一つである「学びに向かう力・人間性等」の根底にあるものと合致する。そして、「自分と自分を取り巻く世界のつながり方が修正・洗練・統合されていることへの気付き」が「学びの自覚」と捉えている(図4)。



図4 「学びの自覚」のイメージ(出典 高橋)

また高橋は、「授業者が『教えたこと』から授業をつくるのではなく、『教科で育みたい人間像』を明確に抱き、『教科で願う学び』をもって授業を構想することが重要になる」と述べている。例えば、教師が単元計画を作ることはもちろん、その前段階で「外国語の背景にある文化に対する理解を深めること」や「聞き手、読み手、話し手、書き手

に配慮すること」の具体像を持たなければならぬと考える。

英語教師として、「英語」という言語を教えることももちろん大事だが、それ以上に「英語」を通して、つまり、英語によるコミュニケーションの一連の過程を通して、生徒一人一人が、自分の思いや考えを豊かに表現することを大切にしたいと考える。すなわち、習得した知識・技能を活用してツールとしての英語を活用することで得られる喜びを生徒一人一人に味わせたい。同時に、「どのように教えるか」という教師の視点から、生徒の「何を学ぼうか」という視点へのシフトチェンジこそが「学びに向かう力・人間性等」へとつながると考える。

#### 4 めあて・振り返りの充実

##### (1) 「めあて」「振り返り」とは

「『問い』が生まれる授業サポートガイド」（沖縄県 2022）では「生徒が学習の見通しをもって授業に臨み、主体的に学習していくためにも『めあて』の設定は重要」とある。だからこそ、「めあて」を教師から一方的に示されることなく、生徒からの「問い」や「つぶやき」を生かすことを大事にしたい。毎回のこの積み重ねが「自分ごと」として学びの積み重ねにつながると考えるからである。さらに「何のために振り返りを行うか」については、「これまでの学びを自覚させ、これからの学びを見通し次の学びにつなげるため」だと考える。そこで、次の学びの一助となることをねらい、振り返りシートにHW欄を設け家庭学習を促すようにした（図5）。

Day		Date		weather&feeling	
Goal					
Wrap-up	ホームワーク記入欄				
Reflection					

図5 自己調整を目指す振り返りシート

##### (2) 中間指導

振り返りの場面において、次の学びにつなげる、という視点でも中間指導を入れることは大切である。例えば small talk 等の言語活動の途中で中間指導を入れるのは、生徒自身に自分の問題点に気付かせ、教師が適切にフィードバックを与えることで、よりよい表現にしていくためである。逢沢（2022）は、「『伝えたい事があるけれど、うまく伝えられない』『ああ、そうやって英語を使えば伝えられるんだ』ということに生徒自身が気付き、できなかったことをできるようにする」ことが、中間指導を行う意味であると述べている。

同様に、単元の途中で中間指導を入れることで、生徒一人一人が My goal と照らし合わせ、必要なら軌道修正を行い、あらためて今自分は何をすべきか見えてくると考える。

また、「内容面」と「言語面」の両方から指導を入れることにも留意したい。何を意識して学習に取り組めば苦手が克服できるか、あるいは得意になる可能性が高まるかを理解し、それを意識して取り組むことで、学びに向かう土台を確固なものにできるであろう。その際、教師側からだけでなく、生徒間においても、適切なフィードバックが大切となる。それにより、自己効力感が高まったり、学び方に対してのフィードバックを得ることが期待できるからであり、さらに生徒のよりよい変容が促されると考える。また全体で振り返りを共有する場面を作ることで、どのように振り返りの視点をもってよいかわからない生徒や、何を書いてよいか分からない生徒の見本になる効果も期待できる。あわせて自分とは違う振り返りの視点に気付くことで、振り返りの内容面も含めた学習への意欲付けは高まっていくと考える。

## VII 授業実践

### 1 単元名 Lesson6 Castles and Canyons 『ONE WORLD English Course 2』

#### 2 単元の目標

- (1) 形容詞や副詞を用いた比較表現の特徴やきまりを理解している。人物や事物について、形容詞や副詞を用いた比較表現を用いて書く技能を身に付けている。【知識および技能】
- (2) AETが「行ってみたい」と思えるような旅行ジャーナルを作成するために、修学旅行先の九州のおすすめスポット、店、名物に関する事実や考え、自分たちが体験したことの気持ちなどをまとまりのある文章で書いている。【思考・判断・表現】
- (3) AETが「行ってみたい」と思えるような旅行ジャーナルを作成するために、修学旅行先の九州のおすすめスポット、店、名物に関する事実や考え、自分たちが体験したことの気持ちなどをまとまりのある文章で書こうとしている。【主体的に学習に取り組む態度】

#### 3 単元について

##### (1) 教材観

本単元は、学習指導要領（平成29年告示）の内容「(2)情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項」の「ウ 日常的な話題や社会的な話題について、伝える内容を整理し、英語で話したり書いたりして互いに事実や自分の考え、気持ちなどを伝えあうこと。」を取り扱う。言語材料として、比較（比較級・最上級）を扱う。Castles and Canyonsのタイトル通り、日本やアメリカの観光地について、また、自分が住んでいるところについて紹介している内容である。修学旅行を控えているので、旅行ジャーナルの作成をパフォーマンス課題とすることで、AETへ伝えたいという相手意識・目的意識がより具体的になると考える。

##### (2) 生徒観

6月に実施した沖縄県学力定着状況調査によると、「まとまりのある文章を読んで、内容に沿った自分の意見を表現することができる」項について、本校2学年は沖縄県の正答率より6.1ポイント下回った。また、無答率については、沖縄県平均より8.9ポイント高い。「書くこと」をあきらめている姿勢から、「書きたい」「書く必要がある」場面を意図的に多く作ることで、「書くこと」を楽しみ、そして「書くこと」に自信を持たせたいと考える。

10月に自己調整の3要素を取り入れた英語学習についての意識調査を実施したところ、「毎時間の英語の授業のねらいを理解している」生徒は53.6%であった。「毎時間の英語の授業の終わりに、ねらいをどれだけ達成できたかを振り返っている」生徒は60.7%であった。My goalと照らし合わせることで毎時間の授業のねらいがより理解できると思われる、また振り返りもさらに充実してくると考える。また、「何のために英語の勉強をするのか、自分なりに考えている」生徒は60.7%いた。メタ認知をしっかりと働かせられるような手立てを工夫することで数値の向上が見られると考える。次に、「英語の学習が好き」と答えた生徒が21.4%、「英語を学ぶことは楽しい」と答えた生徒は25.0%であった。しかしながら、「英語の学習に意欲的に取り組んでいる」と答えた生徒は50.0%、「英語の学習は将来役に立つ」と答えた生徒は89.3%いる。学んだ知識を活用してその表現が役に立つこと、相手に伝わってうれしい、と思う動機づけの場面が増えることで「英語の学習が好き」で「英語を学ぶことは楽しい」と思う数値も上がっていくと思われる。学習方略については、「毎時間の英語の授業の予習や準備をして授業に臨んでいる」生徒は35.7%であった。安心して質問できるなど学びやすい「内的・質的環境」づくりを整えることを進めたい。

(3) 指導観

単元の最初の時間にJTEとAETのやりとりを通して、「比較」表現がコミュニケーションに与える影響を考えさせることで、相手に分かりやすく伝わりやすいことに気付かせたい。同時に、パフォーマンス課題として修学旅行ジャーナルを作成するためにおすすめの場所等に関する事実や考え、自分たちが体験したことの気持ちなどをまとまりのある文章で表現する力を育てたい。さらに単元のはじめにゴールの見通しを持たせることや毎時間の振り返りはもちろん、単元途中での振り返りの場や家庭学習との連動を意識させた工夫を行う。自己調整を図る視点を示すことで、継続して学習に向かう姿勢が確立されることができよう。また、修学旅行で、沖縄との比較ができることでAETに伝えたいという思いが自然に「書くこと」につながりライティングの楽しさが増すことも期待できる。

4 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
書くこと	形容詞や副詞を用いた比較表現の特徴やきまりを理解している。人物や事物などについて、形容詞や副詞を用いた比較表現を用いて書く技能を身に付けている。	AETが「行ってみたい」と思えるような旅行ジャーナルを作成するために、修学旅行先の九州のおすすめスポット、店、名物に関する事実や考え、自分たちが体験したことの気持ちなどをまとまりのある文章で書いている。	AETが「行ってみたい」と思えるような旅行ジャーナルを作成するために、修学旅行先の九州のおすすめスポット、店、名物に関する事実や考え、自分たちが体験したことの気持ちなどをまとまりのある文章で書こうとしている。

5 単元の指導と評価の計画（全11時間）

時	◆目標（ねらい） ○主な活動等	評価			
		知・技	思判表	態度	評価規準・方法等
1	◆単元で学習する内容や単元のゴールを確認し、見通しをもたせながら自己目標をたてる。 ◆比較表現が相手にわかりやすく伝える手立てになることに気付かせる。 ○自分は何ができるか・何をしなければならないのかをしっかりと考え自己目標をたてる。			う。生徒の活動状況を記録に残す評価は行わない。ただし、ねらいに即して活動させるだけに見届け、指導に活かすことは毎時行	
2	◆比較級・最上級の働きを理解することができる。 ○ペア/グループで本文のリスニング・音読に取り組み、キーワードを抜き出しながら大意をつかむ。				
3	◆KentaとEmilyのやりとりを参考に、沖縄や九州の建造物や名所について書ける。 ○教科書の観光地を紹介する文を参考にしながら、修学旅行に行かないAETのために九州の建造物や名所について英語で書く。				
4	◆比較級・最上級の働きを理解することができる。 ○ペア/グループで本文を参考にオリジナルの英文を書く。				
5	◆自己目標に対する中間の振り返りを行う。 ◆Aya, Bob, Kentaのやりとりを参考にしながら、比較級・最上級の働きを理解することができる。 ○自己目標の達成状況について、中間の振り返りを行う。（中間指導） ○教科書の観光地を紹介する文を参考にしながらトピックについて尋ねたり伝えあったりする。				
6	◆比較級・最上級の働きを理解することができる。 ○教科書を参考に、地元の首里城について紹介する英文を書く。				

7 本時	◆比較級・最上級の働きを理解することができる。 ○沖縄とハワイの良さを比べて伝え合う。	記録に残す評価 は行わない。た だし、ねらいに 即して生徒の活 動状況を見届 け、指導に活か すことは毎時行 う。活動させる だけにならない よう、十分留意 する。			
8	◆比較級・最上級の働きを理解することができる。 ○教科書の観光地を紹介する文を参考にしながら、「比べる」視点を入れて沖縄のことについて英語で書く。				
9	◆文法事項のまとめ ○本文の内容についての要約を空欄補充で確認し、英文にしてまとめる。				
10	◆パフォーマンス課題				
11	◆単元テストを通して、本単元で学んだことを整理する。				
		○ 書くこと	○ 書くこと		
			◎ 書くこと	◎ 書くこと	
		◎ 聞くこと 書くこと	◎ 聞くこと 書くこと		

◎記録に残す評価 ○指導に生かす評価（形成的評価）

## 6 単元末または学期末におけるパフォーマンステストとそのルーブリック

### (1) パフォーマンス課題

AETに「行ってみたい」と思えるように、修学旅行先の九州のおすすめスポット、店、名物に関する事実や考え、自分たちが体験したことの気持ちなどを書いた旅行ジャーナルを作成する。

### (2) ルーブリック

条件1：AETの興味・関心があることに関連付けて紹介している。

条件2：AETに「行ってみたい」と思ってもらえるように、九州のおすすめスポット、店、名物などの情報を工夫して伝えている。

条件3：自分の考えたことや感じたことなどを理由とともに述べている。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a (3点)	誤りのない正しい英文で書くことができる。	3つの条件を満たして書いている。	3つの条件を満たして書こうとしている。
b (2点)	一部誤りがあるが、コミュニケーションに支障のない英文を用いて書くことができる。	2つの条件を満たして書いている。	2つの条件を満たして書こうとしている。
c (1点)	bを満たしていない。	bを満たしていない。	bを満たしていない。

## 7 本時の学習 【7/11時間】

### (1) 目標

比較表現を活用して沖縄とハワイについて英語で書くことができる。

### (2) 本時の授業の工夫

- ① 対教師だけでなく、ペアでの「やりとり」「学びあい」を通して自ら考えさせる場を多く持たせ、自己調整学習を支援する。
- ② 実在する相手に対してカードを送る場面を設定することで「書くこと」の必要性を持たせ、「書きたい」意欲を喚起させ、「書くこと」を楽しませる。

(3) 展開

	学 習 活 動	○ 指 導 上 の 留 意 点	評 価 項 目 ( 方 法 )
導 入 8 分	1 あいさつ 2 帯活動 Small talk	○ JTEとAETの会話を聞いて small talk を始める。 ○ ペアで1分間, topic についてやりとりをし, 英語学 習の雰囲気を作る Today' s topic : What is your No.1 snack?	
展 開 30 分	3 本時のめあての 確認 4 写真を見ながら ペアで, 言語活 動に取り組む。 5 AETの両親に 沖縄とハワイの 良さを伝える カードを書く。 6 本時の学びを パフォーマンス 課題でどう生か すことができる か考える。	○ 生徒たちからめあてを引き出す。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">Today's Goal 沖縄とハワイの良さを比べて伝えよう。</div> ○ これまで学んだ比較級を活用させながら取り組ませ る。 ○ Authentic なねらいを設定するために, クリスマス カード作成を通して相手意識を持たせる。 【努力を要する状況と判断される生徒への支援】 ・ 教え合いができるようなペアの組み合わせを工夫する。 ・ 机間指導でヒントを与えながら学習ツール活用を促し, 既習事項を活用させる。 ○ 教師の質問に答えることで学んだ知識を生かすことを めざす。	【思判表】相手に 喜んでもらえるよ うに, 自分で考え た表現を簡単な語 句や文を使って書 いている。 【態度】相手に喜 んでもらえるよ うに, 自分で考えた 表現を簡単な語 句や文を使って書 こうとしている。
終 末 12 分	7 まとめ 振り返りシート に記入し, 提 出 する。 8 振り返り 本時の振り返り をする。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">まとめ Okinawa's beach is as beautiful as Hawaii's beach. etc.</div> ○ 本時で学んだことについて, 振り返りの視点を示す。 ○ 自己目標達成につなげるための今日の家庭学習の取り 組み内容について記入させる。 ○ 振り返りシートに記入後, 提出する。	

(4) 板書

Day: Tuesday  
Date: December 12th  
Weather & feeling: cloudy & sleepy

単元目標: 修学旅行ジャーナルを作成し, 旅行後 Darcy先生に見せよう!  
めあて: OkinawaとHawaii良さを比べて伝えよう。

3つ以上 [ ~est  
the most ~ of all ...  
2つを比較 [ ~er than ...  
more ~  
同くらい as ~ as ...  
一番 the best

reflection  
振り返り  
① どんなことに気をつけて  
カード作成をした?  
② ペア, 友だちの参考にした点

HW  
・ 単語調心  
・ 音読

令和5年12月12日 火曜日

## Ⅷ 結果と考察

### 1 作業仮説(1)の検証

自己調整が図られるように目的・場面・状況の設定を工夫し、単元目標を明確にすることで、生徒は相手意識・目的意識をもち、主体的に自分の思いや考えを英語で表現し、学びに取り組むことができるであろう。

#### (1) 目的・場面・状況の設定の工夫

「文法はコミュニケーションを支えるものである」ことを踏まえた上で「理解していること・できることをどう使うか」という「思考力、判断力、表現力等」の育成を目的として、検証授業の単元である第7時のねらいを「沖縄とハワイの良さを比べて伝えよう」とした。本時はJTEとAETが、沖縄とハワイを比較しながら本時のねらいにせまり、コミュニケーションの真正性を高める工夫を行った。生徒は相手意識・目的意識をもつことによって、主体的に学習に取り組めると考え、ハワイ在住のAETの父へクリスマスカードを作成するという課題に取り組ませた。本時はクリスマスも近いということで、自然な流れでのクリスマスカード作成、しかも実在するハワイ在住の相手へ、主体的に自らの思いや考えを英語で表現できる機会であると考えたからである。これは「書くこと」の必要性を感じる目的・場面・状況の設定を工夫したものである。生徒作品を取り上げながら作業仮説(1)を検証していく。

図6は2人の生徒のクリスマスカードである。両生徒ともハワイと沖縄を比較しているが、使用した文法は異なっている(下線参照)。授業では、「AETの父に沖縄とハワイの良さを伝えるために」「クリスマスが近いのでカードを作成して」「喜んでもらうために」という目的・場面・状況を設定し、「書く必要性」を持たせ、また「書きたい」意欲を喚起させることによって、生徒たちは

生き生きと取り組むことができた。

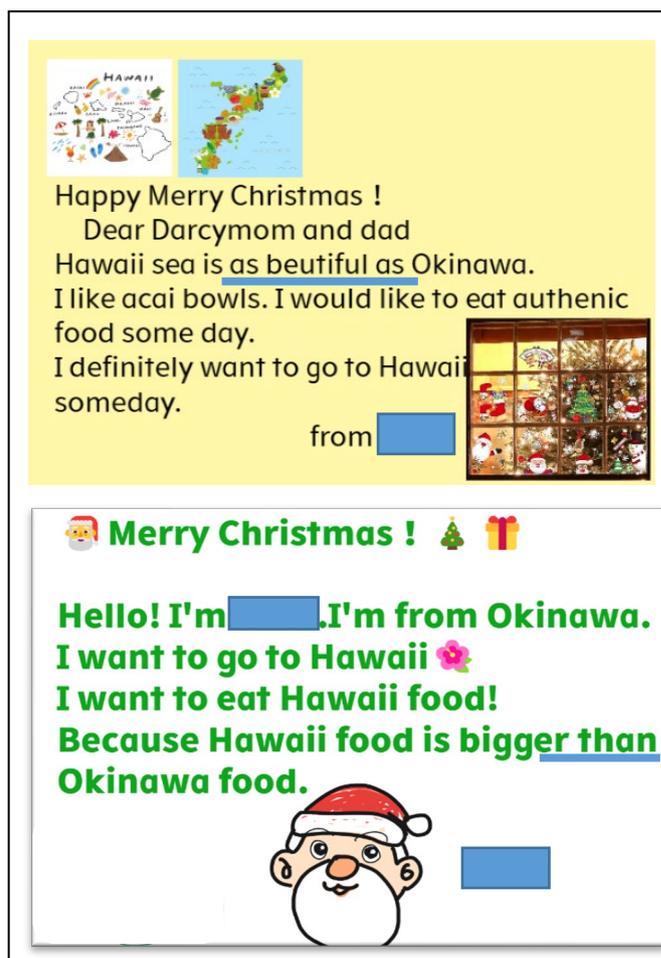


図6 生徒のクリスマスカード(下線は筆者による)

事後のアンケートから、表2に生徒の主な振り返りを示す。

表2 カード作成についての振り返り(下線は筆者による)

- ・ リアルな相手にこのような英語で書く機会がないからとてもいいと思いました。
- ・ 相手意識って普段の英語の授業でも大切だなと思いました。
- ・ 誰かに送るとなると本気になって取り組める。だから英語力があがる気持ちになる。
- ・ 実際に相手に送るときに英語で書くときに習ったのを使えたときはとっても嬉しかったです。
- ・ 相手が不快に思う気持ちは書かないで、自分が書かれて嬉しいことを書きました。

この結果から生徒は「相手意識・目的意識」を持てたことが読み取れる。また、

17.4%の生徒が「難しかった」と回答した。その内容を分析してみると、英作文の難易度というよりも「本物の外国人としゃべる（伝える）のは文章構成がおかしくないかなど気にしてしまい難しかった」「どうやったら喜ぶのか考えるのが難しかった」など、書く内容を吟味したためであることが分かった。そして、ほとんどの生徒がこの経験を肯定的に捉えていた。教科書の中でなく、実在する相手に、既習事項を活かしながら試行錯誤しつつ自らの思いや考えを表現を使ってカード作成に取り組むことができた。

## (2) 相手意識を高めるパフォーマンス課題

検証授業の単元のパフォーマンス課題として、修学旅行ジャーナル作成を課した。これは、生徒の「表現したり伝えあたりしようにしている状況」と「言語活動の取り組みに関して、見通しを立てたり、振り返ったりする状況」の両方を見取することで、主体的な学習に取り組む態度につながると考えたからである。AETが「行ってみたい」と思えるように、修学旅行先のおすすめスポット、店、自分たちが体験したことの気持ちなどを書いた修学旅行ジャーナルを取り上げ検証する。

自分たちが楽しかったことをAETと共有したい、と考えた生徒や、沖縄と九州の気候をはじめ、路面電車などの違いに触れた生徒など、生徒によって取り上げる題材はさまざまであり、相手意識・目的意識が多種多様であったのが興味深い。同時に、生徒たちの大好きな「AETが『行ってみたい』と思うように」「修学旅行で楽しんできた体験を英語でカタチにするために」という目的・場面・状況の設定が生徒たちの思考力、判断力、表現力等を働かせる結果になったと思われる。

図7の生徒Aは、AETがスイーツ好きであるという情報をもとに、旅行ジャーナルを作成した。そして、AETがその食べ物をイメージしやすいように、本単元で学んだ比較の文を活用した。

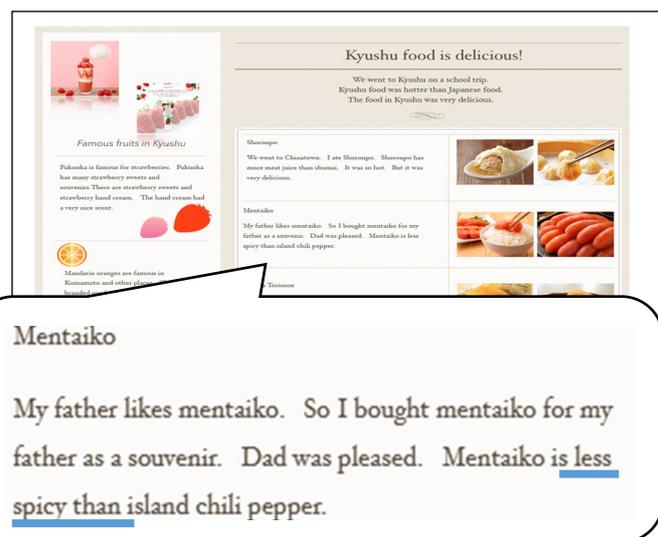


図7 生徒Aのパフォーマンス課題（下線は筆者による）

図8生徒Bは、自主研修で立ち寄った場所について掘り下げ、既習事項を活用しながら紹介している。小見出しを入れて、AETの興味を惹くように書きだしている。Whereの基本的な使い方はもちろん、”There are ~.”という便利な表現を思い出し、既習事項を使って紹介している。

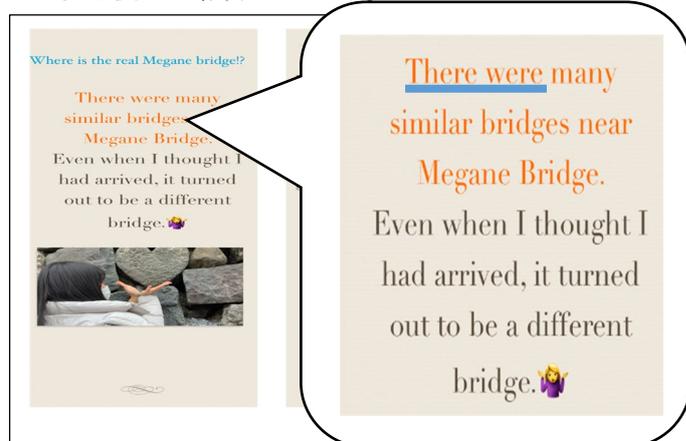


図8 生徒Bのパフォーマンス課題（下線は筆者による）

いずれも、ルーブリックの3つの条件を押さえつつ相手（AET）が興味・関心ももつように楽しそうに英作文に取り組んでいた。

パフォーマンス課題について、振り返りのアンケートを実施した。「工夫したことはあるか」について88.2%が「ある」と回答しており、キーワードとして、「相手が興味をもつように」「わかりやすさ」「読みやすさ」「楽しませるように」を挙げた。パフォーマンス課題で工夫したことについてのアンケート結果を図9に示す。

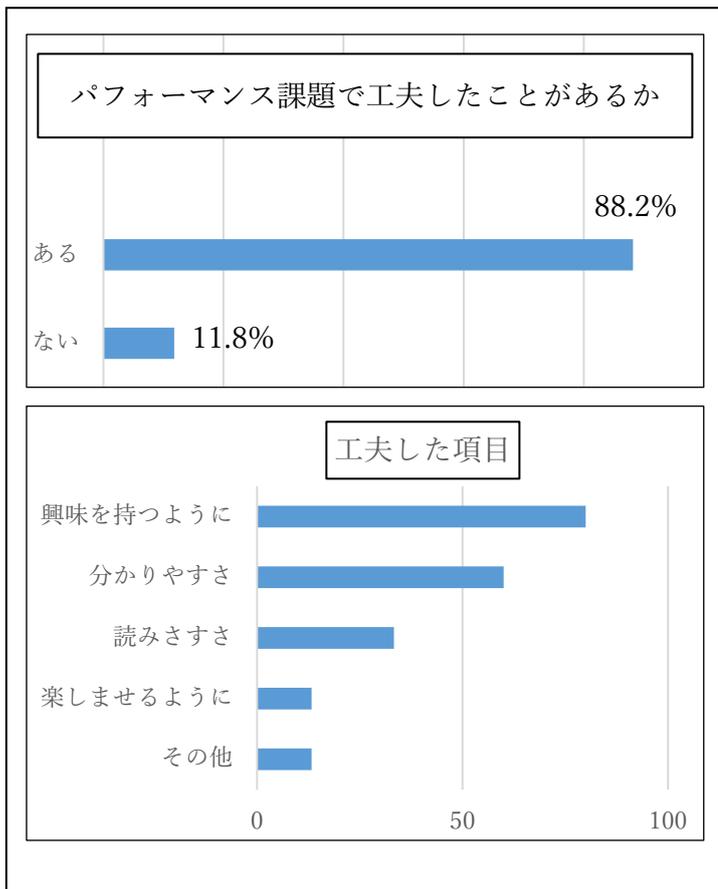


図9 パフォーマンス課題で工夫したこと

「読む人が興味をもつように写真を入れたりした」「興味をもつてくれるように問かけ文をたくさん入れた」などいわゆる「相手意識」をもって作成したことがわかった。さらに、「沖縄と比べる英文を書いた」「～er than を使って書いたり the most (of in) を使って沖縄の食べ物などを九州と比較して書いた」など本単元で履修した比較の文法を活用することで、相手によりわかりやすく伝えることに気付くことができた。この結果から、相手意識・目的意識を持たせる工夫によって生徒は主体的に学習に取り組めたと思われる。

またアンケート結果から、「わかりやすく文の構成を考えるのが難しかった」と答えた生徒が43.5%いた。これは、本単元で学習した比較の文法以外の既習表現や、トピックや伝えたいことをいかに広げることが難しかった、と思われる。「現在学んでいる表現は使えるが、もっとその他の表現をどうやって使っているのか分からない」と考える生徒が意外と多い。既習事

項を活用して豊かに表現できるようになるには、学びの積み上げが必要だと考える。そのため自己調整を図ることが求められる。

メタ認知を働かせることで、目標を明確化でき学習意欲を高めることを繰り返すことで学びの継続が生まれる。このことにより、主体的に自分の思いや考えを英語で表現し、学びに取り組むことができることにつながると考える。実際、動機づけと学習方略は、学業成績において補完的な役割を担っていると考えられる。

このように、自己調整が図られるように目的・場面・状況の設定を工夫し、単元目標を明確にすることで、生徒は相手意識・目的意識を持ち、主体的に自らの思いや考えを英語で表現し、学びに取り組むことができたと言える。

### (3) 自己調整を図るための座席の工夫

動機づけや学習方略の一助として、「英語席」を取り入れた。「英語席」とは、英語の時間のみのペアでの座席配置で、言語活動がしやすい環境づくりの一環として導入している。学び合いを通して、学習意欲を高めていくことや、サポートを得られやすい環境づくりが、主体的な学びにつながると考えたからである。

生徒たちに「英語席」の有効性についてのアンケートをとると、58.3%の生徒が、「英語席は役立った」と回答している。「分からないことを聞きやすかった」「教えてもらえた」という意見はもちろん、「普段(ペア活動を)やったことのない人とできてやり方が(自分と)変わったりしたから」という意見もあった。これは、自分とは違う視点で考えを深めることができることに気付いたことになる。英語席のペアを通して、今までの自分のやり方とは違う考え方や学習方法に触れ、新しい気付きを得た経験を持たせたと言える。それにより、新たな学習方略を得ることが可能になり、学習に対する意欲が高まり学習成績の向上につながっていくであろうと考える。ペアを通して、新しいメタ認知を持たせた、と考える。また、物理的に近い他者との学び合いにより、互いに切磋琢磨するこ

とを通して、自らの学びや考え方の幅を自然に広げることができ、学習方略の選択肢が増えることにつながると考える。

効果的な英語席の組み方として、「学習の最適化のための人的環境」を工夫することで、生徒たちの主体的な学びにつながると思われる。それにより、生徒自らが自分の思いや考えを英語で表現するなどして、主体的に英語学習に取り組むことも期待できる。

## 2 作業仮説(2)の検証

振り返りの場面において、自己調整学習を生かして振り返りの具体的な視点を示すことにより、自らの学習を自覚的に捉えることができ主体的に英語学習に取り組むことができるであろう。

### (1) 自己調整学習についての検証

見通しを持った計画的学習をめざし、単元の最初の時間に、単元目標を確認しながら、生徒一人一人に My goal を決定させた。また中間指導を単元計画の第5時で入れ、必要に応じてその My goal に軌道修正を入れさせた。図10に生徒Cの振り返りシート中の My goal、中間指導の記録を示す。

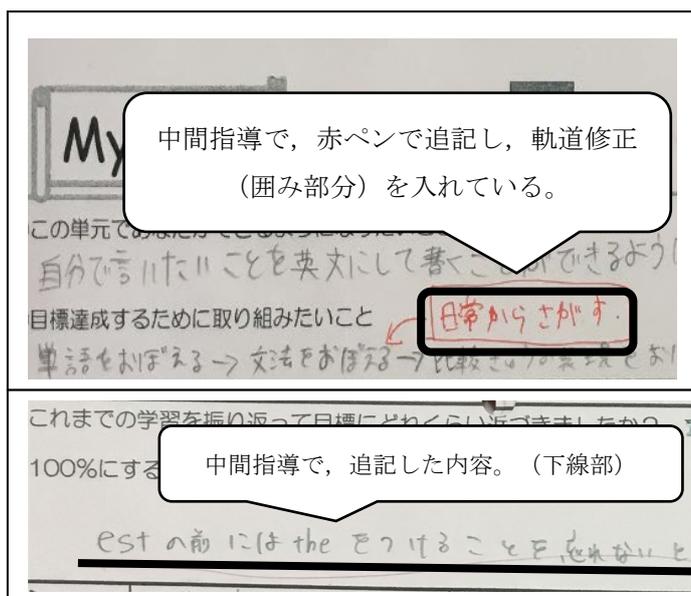


図10 生徒Cの振り返り(囲み・下線は筆者による)

ここであらためて、表1で示した自己調整

学習の3要素を組み入れた授業を、生徒Cの変容とあわせて検証する。

生徒Cは My goal を「自分で言いたいことを英文にして書くことができるようになりたい。一番苦手だから書けるようにしたらテストの点が上がると思う。」と設定した。「英文を書く」ことに焦点を当て、自分自身が苦手であるところを「自己モニター」を働かせ認知した上で「目標の明確化・具体化」につながっている。その目標達成のために取り組みたいこととして、「単語を覚える→文法を覚える→比較級の表現を覚える」とした。ここでも単語から文法、そして表現へ、と「学習の意味・意義の理解」を経て目標つまり My goal 実現へ向けて動機づけを図った。その後、中間指導時には赤ペンで「日常からさかす」と追記した。

このことから、「学習の最適化のための環境選択・構成・創造」が見られる。さらに「学びの継続」から「目標実現の行動化」として、単元の終わりには、My goal を達成するために工夫したこと等として「文法を覚えるというかんじじゃなくて、日常のものをくらべてみたら頭に入りやすかった」と記載している。また、次の学習に向けては「自分で一から英文を書く力が伸びました。次の学習でも分かりやすくメモしたり、日常のものと合わせて考えていきたいです。」と学びを振り返っている。これは、自己調整がうまく機能し、自らの学習を自覚的に捉えることができ、英語学習に前向きに取り組むことができた好例といえる。この自己調整学習を活かした生徒Cの変容を表3に示す。

また、生徒Cが文法を「暗記」でなく「コミュニケーションのため」に整理した結果、自らの学習を自覚的に捉え、思考を整理したことがうかがえるメモを図11に示す。

表3 自己調整学習と生徒Cの変容

自己調整学習要素	期待できる効果	生徒Cの変容
メタ認知	見直しをもつた 計画的学習 ↓ 自己モニター ↓ 自己評価 ↓ 目標の明確化・ 具体化	「自分で言いたいことを英文にして書くことができるようになりたい。」  「書く」に焦点化  苦手に焦点化
動機づけ	学習の意味・ 意義の理解 ↓ 自己効力を有する ものとしての 自己認知・ 意欲の喚起 ↓ 目標実現へ 意識化・意欲化	取り組みたいこと 「単語を覚える→ 文法を覚える→比較 級の表現を覚える」  My goal 実現へ 動機づけ
学習方略	学習の最適化のための 環境選択・構成・創造 ↓ 学びの継続 ↓ 目標実現への行動化	中間指導追記 「日常からさがす」  学びの振り返り

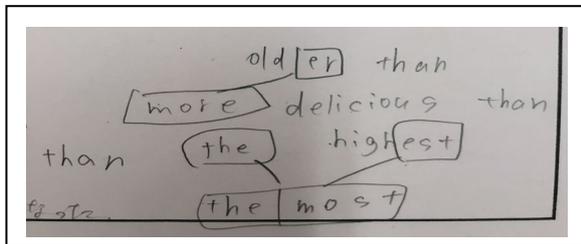


図11 生徒Cの思考を整理したメモ

これらのことから、学習内容を自分ごととして考え、積極的に意味付けながら学習に取り組み、文法を「覚える」ではなく「日常からさがす」「日常のものと合わせて考えていきたいです。」という気付きを

得ることができたとうかがえる。

(2) 毎時間の振り返り

生徒の毎時間の振り返りシートに、今日は何を学び、何が理解できたのか、あるいはできなかったのかを自らの学びを言語化してメタ認知を働かせ認識させ、次の学びにつなげることをねらいとして、家庭学習を促すためのHW欄を設けた。つまりは、授業中だけで学びが完結するわけではなく、学校外でも学びの継続を考慮してのものである。

生徒Dは、-er, -est が使えない比較級を学んだ第4時で、「実際に文を書いて使ってみたい」と振り返った。また、「他にも more ~than や the most ~in... など使えと分かりました」と記載後、HW欄に「ならった文法を書いてみる」と記入し、家庭学習に取り組んだ。

家庭学習では、授業で学習したことを復習しながら、自作の英文を作成した。「何を学び」「何ができるようになりたいか」を自覚し主体的な学びにつながったと考える。図12に生徒Dの家庭学習を示す。

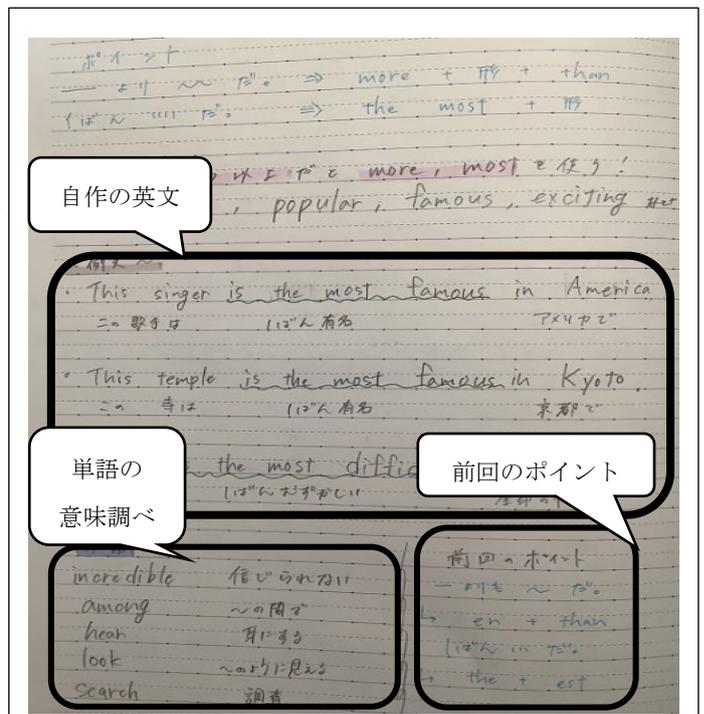


図12 生徒Dの家庭学習 (囲みは筆者による)

振り返りシートのHW欄について、66.7%の生徒が「役に立った」と回答している。

「自分で決めたことだから、やろうという気持ちに前よりはなった」、「自分が間違えたところを書いてそこを家でやれば理解できるから」など「My goal」に沿った「My HW」と捉えることができている生徒がほとんどであった。その結果、全体として授業の予習や準備、家庭学習に取り組んでいる生徒の割合は検証前に比べて6ポイント伸びた(図13)。

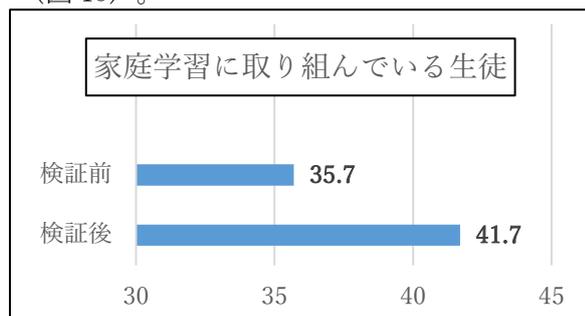


図13 家庭学習についてのアンケート結果

このように振り返りの具体的な視点を示したことにより、生徒は具体的な学習方略を見出すことができたと考える。

しかしながら、まだまだ自己調整の「行動」につながっていないと考える。なぜ学習方略につながらないのか、どうしたらつなげられるのかについて分析・考察を進め

るとともに、具体的な「行動」「学習方略」の構築について今後も丁寧に取り組んでいきたい。

## Ⅸ 研究の成果と課題

### 1 成果

- (1) 自己調整学習が図られるような目的・場面・状況の設定を工夫することで、生徒は相手意識・目的意識をもち、主体的に自分の思いや考えを英語で表現し、学びに取り組むことができた。
- (2) 学習の見通しを持たせることや毎時間の振り返りを通して、My goal やHWと連動させることで生徒たちは自己調整を図ることができ、学習方略がより具体的になった。

### 2 課題

- (1) 生徒が自己調整を図れるような目的・場面・状況の設定の工夫とあわせて、既習事項をスパイラルに指導することでその定着を図ることが必要であると考える。
- (2) 生徒の動機づけから学習方略へつなげるための分析・考察を通して、自己調整を促す手立ての確立をどう構築していくか今後も丁寧に取り組んでいく必要がある。

#### 【主な参考・引用文献】

- ・文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語編』
- ・国立教育政策研究所 教育課程研究センター (2020) 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 外国語】』
- ・瀧沢広人 (2023) 『「主体的に学習に取り組む態度」の学習評価』 学陽書房
- ・逢沢守 (2022) 『中間指導って何?—今からできる中間指導の4つのポイント—』英語教育 11 大修館書店
- ・山田誠志 (2022) 『全国の実践から学ぶ中学校英語教育 35 のポイント』 日本標準
- ・櫻井茂男 (2019) 『自ら学ぶ子ども 4つの心理的欲求を生かして学習意欲をはぐくむ』 図書文化
- ・自己調整学習研究会 (2016) 自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術 北大路書房
- ・自己調整学習研究会 (2012) 『自己調整学習 理論と実践の新たな展開へ』 北大路書房
- ・伊藤崇達 (2009) 「自己調整学習の成立過程 学習方略と動機づけの役割」 北大路書房
- ・西田寛子\*1・久我直人\*2 (2018) 『自己調整学習の理論に基づいた「生徒の自律的な学び」を生み出す 英語科学学習指導プログラムの開発とその効果†』[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjet/42/2/42\\_42050/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjet/42/2/42_42050/_article/-char/ja/)
- ・伊藤崇達 (2019) 「めあての提示や振り返りの工夫で、子どもが自ら学ぶ力を育む」 [VIEW21\\_kyo\\_2019\\_03\\_toku\\_06.pdf](VIEW21_kyo_2019_03_toku_06.pdf)
- ・高橋政宏 「〈研究総論〉 学びの自覚 (第3年次) —「ありたい自分」を思い描く子ども—」 <32b6fa942a482e22e2a4765970452140.pdf> (shizuoka.ac.jp) [http://fzk.ed.shizuoka.ac.jp/shizuchu/wp-content/...](http://fzk.ed.shizuoka.ac.jp/shizuchu/wp-content/)